

近衛忠大

映像プロデューサー

家を継ぐという意識を若者に求めるのは、なかなか難しい。近衛忠大さんも何年前まではそうだった。しかし、ある会に出るようになって日本を意識し出すと心境に変化が……

「日本というブランドを世界にPRするため」

近衛家の祖は平安時代末期の近衛基実。基実は関白・藤原忠通の長男で、平安京の近衛大路室町にある自身の邸宅を「近衛殿」と呼び、後にそれを家の名前とした。つまり、近衛家はそもそも藤原家宗家の家柄であり、遡ると始祖は大化の改新の立役者、中臣鎌足に辿り着く。

改新後に鎌足が天智天皇から藤原姓を賜ったことに始まる藤原氏の家系は、その後も連綿と続く。平安時代には藤原道長に代表されるように代々、摂政・関白職に就き、栄華を

極めた。道長から下って5代目が忠通であり、その息子が近衛基実だ。

鎌倉時代には公家の家格の頂点に立つ五摂家(近衛家、九條家、二條家、一條家、鷹司家)が成立。近衛家はその筆頭であり、以後、江戸時代までも長く朝廷の公事に携わりながら、政治に関与することもあった。

昭和の初期には内閣総理大臣が誕生した。昭和12〜16年、日本が日中戦争を経て第二次世界大戦へと突入する激動の4年間に3度総理大臣を務めた近衛文麿は、近衛家29代

当主である。文麿は終戦後、戦犯容疑者として逮捕命令を受けるが、出頭を命じられた日の未明に自決。続いて、文麿の長男で陸軍軍人の近衛文隆は、戦後、シベリアに抑留されて11年後に病死した。

先の戦争の時代に2代の当主を失うという辛い経験をした近衛家だが、その後は無事に31代目に継承され、現在に至っている。そして、藤原鎌足以降1360年余の歴史をもつこの家を次に担うのが、長男の近衛忠大さん(39歳)である。

忠大さんの父で現当主の忠輝氏は26歳で養子として近衛家に入った。忠輝氏の父親は細川護貞、母親は近衛文麿の次女・温子である。温子は文麿の秘書を務めていた細川護貞に嫁ぎ、2人の男子を出産。長男は後に首相となった細川護熙、次男が護輝(のちの近衛忠輝)だ。亡くなった近衛文隆と妻・正子の間には子供がなく、正子は後年、文麿の孫に当たる細川護輝を養子とした。護輝は名前を「忠輝」と改め、三笠宮家の長女・甯子と結婚。その長男として生まれたのが忠大さんだ。つまり、忠大さんは文麿の血のつながった曾孫であり、戸籍上では文隆の孫、近衛家の直系というわけである。

「あの近衛さん？」と言われるのが鬱陶しいこともあった

忠大さんは現在、マーケティング・エージェンシー「GTパートナーズ株式会社」に所属。プロデューサーとして、イベント制作から映像制作に至るまで幅広く手がけている。特に外国の企業との仕事が多く、英語とフランス語でコーディネーターの役割も積極的にこなす。そんな国際人としての自覚は、スイス・ジュネーブで育った幼少期から培われたものだ。日本赤十字社に勤める父の仕事の都合で家族が東京からスイスに移ったのは、忠大さんが2歳の時。

その後、一度帰国したが、再び転動となり、15歳まで過ごした。

「ジュネーブは国際都市で、当時、僕が通ったインターナショナルスクールもクラスメイト20人の国籍は15カ国以上でした。小学生の頃からそれぞれが語学の能力を超えたレベルでコミュニケーションをとっていました。また、それだけ国籍が違っていると、子供同士でも話題は自然とお互いの国や文化の話が中心になる。そういう環境で育ったことが、今も仕事においても役に立っています」

中学時代の夢はF1ドライバーになることだった。しかし、母は危険だと猛反対。折しもその頃スイスを訪れていた「ホンダ」の創業者、本田宗一郎氏に息子の説得を依頼した。小学生の頃から宗一郎氏の記事を熟読し、氏が表紙を飾る雑誌「プレジデント」を大切に持っていた忠大少年にとって、神様・宗一郎氏からの「レース以外にも車に携わる道はある」という言葉は絶対だった。

その直後に日本に帰国。車のデザインナーを目指し、学習院高等科時代は予備校でデッサンの勉強をしたが、大学入試直前に、武蔵野美術大学に映像学科が創設されることを知り、方向を転換して映像学科に入学。卒業後はNHKに入局し、ディレクターとして約2年間勤務して、退職。その後、バックパッカーとなり、自



左から、妻の桂子さん、次男・忠晴ちゃん(生後約2ヵ月)、長男・忠映くん(4歳)、忠大さん、長女・美紗子ちゃん(1歳11ヵ月)



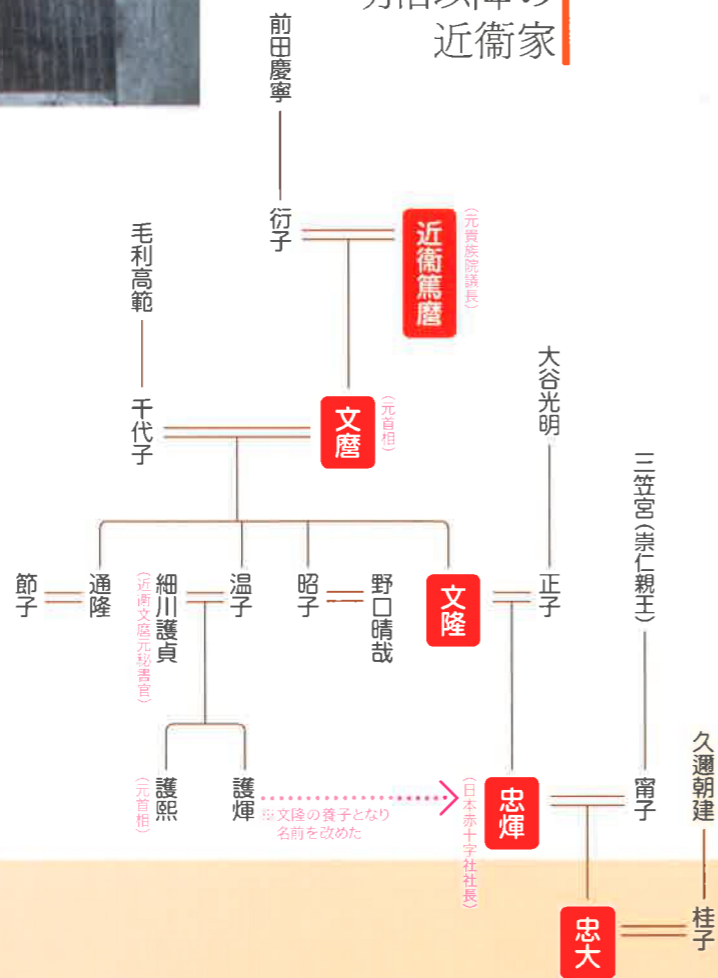
字を見て覚えるしかないという、実に厳しい状況です(笑)。内実を知るほどに、なるほどこういう世界もあるのだということが、素直に納得できるようになりました。そこから、日本の伝統文化を継承することの意味や、旧華族である自分の役割を徐々に考えるようになりました」

近衛家の番組制作がきっかけで一族の絆が深まった

もう一つのきっかけは、NHKの

近衛文麿(左)と文隆。文隆は留学していたアメリカ、プリンストン大学のセーターを着ている。忠大さんの好きな写真

明治以降の近衛家



番組「真珠湾への道」(2002年8月放送)に出演し、文麿と文隆の足跡を訪ねたことだった。

「打診されたのは前の年の春。偶然にも同じ頃、インターネットで祖父・文隆の資料がたくさんあることを発見し、興味を持ち始めていたときだったので驚きました。アメリカ、中国(旧満州)、旧ソ連など、曾祖父や祖父が生きた場所を自分で体験することができると、二度とないチャンスだと思いました」

しかし、容易に承諾はできなかった。子供の頃から親族の集まりで戦中戦後の話はしないという暗黙の了解みたいなものを感じていたし、その場に戦車のプラモデルやモデルガンを持つていくと厳しく怒られたこともあった。文麿と文隆を亡くしたことは近衛家の人々にとって思い出したくない歴史なのかもしれない。番組に関わることで親戚たちの心を傷つけるのではないかと心配した。「それでも、悩んだ末に出演するこ

転車を携えてヨーロッパ25カ国とインドを8カ月間旅して97年に帰国。帰国後は番組制作やイベントの仕事で映像に携わり、4年間で放送局やベンチャー企業など5社を渡り歩く。20代はいたって自由気ままに、あえて近衛の名を意識しないようにして過ごしたという忠大さん。

「名刺を渡すと、たいてい『あの近衛さんですか?』と聞かれるのが、少し鬱陶しい時期もありました。なにより、仕事において変な特別扱いをされたくないという思いが強くなりました。たことも事実です」

だが、30歳前後で起こったいくつかの出来事を機に、忠大さんは自分



コーディネーターの段階から関わったエミリオ・フッチ創立60周年記念パーティーの会場にて。隣は世界的なフランス人演出家、ジェラルド・シヨロ氏で、公私ともに仲良し

宮中歌会始に参加して日本を強烈に意識するようになりました

の出自と正面から向き合うようになる。最初のきっかけは、母に勧められて「披講会」に所属したことだった。「披講会」は旧華族の子弟が属する団体で、宮中歌会始で歌を披露する役目を担っている。宮中歌会始は毎年初めに皇居で行われる伝統行事。今は一般から応募された詠進歌も披露されるが、儀式は平安時代から続く伝統に従って進められる。その際

(上)インタビューと撮影を手がけたドキュメンタリー『ラフ・タフ』の撮影風景。レゲエが誕生する過程にあったスカ、ロックステティなどの音楽の誕生秘話を、生き証人たちにインタビューした。(下)知的発達障害がある人のオリンピック、スペシャル・オリンピックス冬季世界大会を題材にした映画『Believe ビリーブ』。主人公は大会公式記録班の9人。監督・小泉謙一さんは半年にわたって彼らをインタビュー。カメラマンとしてトレーニング。忠大さんは彼らのお兄さんの存在としてこの映画に関わった



©石田昌隆/©DIRECTORS SYSTEM

の役割の中で、最初に節をつけずに歌を読み上げる役を講師と呼び、忠大さんはその役を担当している。

一見、雅な世界に思えるが、実際に歌会始に参加してみると、講師の難しさや緊張感は想像以上だという。「たとえば、皇族方の歌を直筆で書かれた状態で見ることができるのは本番だけで、事前の練習は別の人が写したのを見て行います。同じ内容とはいえ、本物の字を見て練習しないと詠み方はなかなかわからないものなのです。しかも、天皇陛下の御製以外の16首は陛下の側に向けて置かれているので、本番で僕たちが御前に進んで詠むためには逆さまの

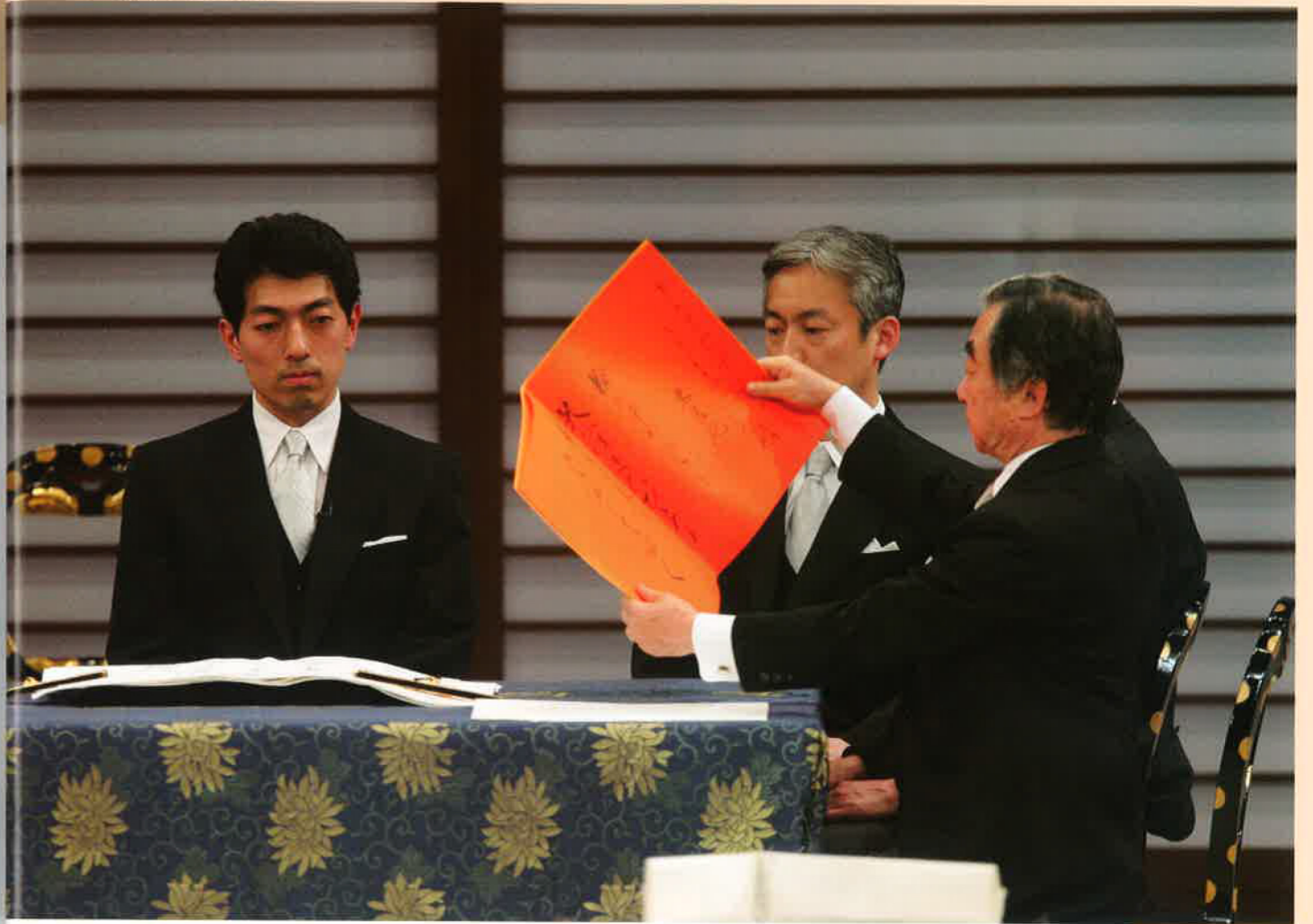
の種牡馬を取り扱う会社と仕事をし、馬の展示会の企画をしたりDVDを作ったりしたのですが、そのときにクライアントから、うちのサラブレッドのウェブサイトに君の血統表も入れておこうか。君の血統のほうも素晴らしいからね」と、冗談をいわれたことがあります。昔はそういうことも嫌だったのですが、今は一緒に笑えるようになりました」

近衛家の次期当主として今の自分に何ができるのか。忠大さんは考え続けている。たとえば、京都にあり、藤原道長自筆の『御堂関白記』(国宝)をはじめ、近衛家に伝来する文書や美術品など20万点を保管する陽明文庫のこと。

「貴重な資料をこの先ずっと維持していくためには、これまでとは違う新しい考え方も必要かもしれません。ゆくゆくは近衛家の当主となる僕も理事になるのだからと思うのですが、今の時期から関われることもあるのではないかと考えています」

さらには、皇室との関わり方。五摂家筆頭の近衛家は昔から皇室のお側において、近衛とは「陛下の近くをお衛りする」という意味だと教えられたという。また、忠大さんの母が三笠宮崇仁親王の長女であることから、皇室を身近に感じているという。「母は臣籍降嫁して皇室の外に出た者として、日頃から実の父母である

©A-1 撮影・藤島直人/日本文化財団



平成20年の歌会始の儀では父、忠輝氏が司会進行役の読師を、忠大さんが講師を務めるという貴重な経験をした。写真は、'06年に国立劇場で行われた歌会始の再現「和歌の披露」でのもの

とにしました。30を過ぎて、自分もそのうち家族を持つのだということを意識したとき、今のままでは自分の子供に自分の家族のことをうまく説明できないと思ったのです。2代の当主を失ったことで一時期、空白になった近衛家のことを、少しでも僕が補って継承していくことができれば、と。うちの父は、血はつながっているとはいえ20代まで細川の家で育った。そういう意味では、僕は文隆以来55年ぶりに近衛家に生まれた長男ですから、つないでいくことに対して責任がある。そう思いました」

いざ動き始めると、忠大さんの懸念は払拭された。親戚に思いを伝えようと、みな快く承諾し、昔の話を聞かせてくれたり写真を見せてくれた。番組が放送される際には一族が集まって一緒にテレビを見た。そして、その日を機に、それまであまり連絡をとらなかつた親戚たちとも気軽につきあえるようになったという。

「番組をきっかけに、確実に一族の絆が強くなったと思います。さらに嬉しかったのは、見てくださった僕と同世代の方々から、自分の先祖のことを調べてみたい、とか、戦争の

ことに興味を持ち始めた、という感想をいただいたことです。それも文隆と文隆のおかげだと思っています」

その後、忠大さんは番組で取材した内容に加筆して、著書『近衛家の太平洋戦争』もまとめ上げた。

皇室との関わりも自分なりのスタンスでお力添えできたら

ところで、近衛家一族にはゴルフの達人が多く、特に文隆はアメリカでのプリンストン大学留学時代にゴルフ部のキャプテンとして活躍し、数々の大会で好成績を収めたそうだが、忠大さんは？

「僕が好きなのはどちらかというと激しいスポーツ。子供の頃から親しんだアルペンスキーやホッケー、フットサルは、今も時間があると楽しんでます。父は東京ゴルフ倶楽部のメンバーですが、プレイするのは年に1回くらいです」

2004年に結婚し、今は3人の子の父親となった忠大さん。会社へは自転車通勤、月に一度の披露会の練習にもまめに参加している。新しいことを創造し続けるクリエイティブな仕事と、旧華族として文化を継承していく役割。その振幅はかなり大きい、どちらも自分の務めであり、今はそのギャップの大きさを楽しむことができる自分がいる。

「今年、『Darley』という競馬



母が宮家に対する旧華族のスタンスの見本を示してくれました

三笠宮殿下、妃殿下に対して敬語を使うなど、僕が幼い頃から宮家に対するスタンスの見本を示してくれました。僕も自然とそれを身につけてきたので、陰ながらお側に仕えているような感覚もあります。お衛りするといっても、今は具体的には歌会始でご奉公することしかありません。ただ、歌会始はその昔は紅白歌合戦のような対抗戦で、今は「ポップベスト10みたいなものですよ」と、僕が説明すると、若い人にもすんなり理解していただけるようなこともある。そんなふうには、いい意味で皇室のスポークスマンのような形でお力添えできれば、と思います」

今の会社の仲間たちと掲げている夢。それは、日本というブランドを世界で紹介していくことだ。

「ハリウッド映画に出てくる妙な日本人像ではなく、本物の日本のいい部分や伝統というものを、自分たちの手で発信していきたい。それは近衛家や旧華族の一員である自分の役目とも大いに関わってくることで、小さなことからでも「一歩一歩、実現していけたらと思っています」

このえただひる 1970年東京生まれ。94年、武蔵野美術大学映像学科卒業、NHKに入局。教養番組部に配属される。96年に退職し、海外を旅する。ソニーピクチャーズTV、SUNプロデュースなどを経て、2004年よりGTPパートナーズに所属。著書に『近衛家の太平洋戦争』(NHK出版)